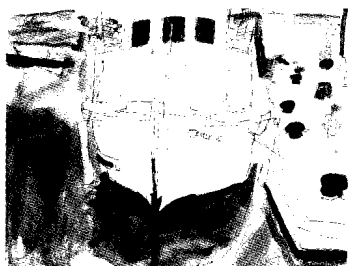


セピア色の写真

諸井薫

諸井薫

セピア色の写真



文藝春秋

セピア色の写真

昭和六十二年三月二十五日 第一刷
昭和六十二年四月十五日 第二刷

定価一〇〇〇円

著者 諸井 薫 もろい かおる

発行者 西 永達 夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―三
電話 東京(二六五)一一二一

郵便番号 一〇二

印刷 大日本印刷
製本 中島製本

※万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Kaoru Moroi 1987

Printed in Japan

ISBN 4-16-341430-4

セピア色の写真 目次

遺言 7

いやらしい目つき 16

似非グルメ 20

速読について 29

雀百まで 38

気くばりをすすめられない理由 43

血縁 52

父よ怯むなかれ 61

酒場の常連 70

そこそこ紳士、ときどき紳士 76

遊びほど怖いものはない 83

されどタバコ 97

貯金箱 106

内需不拡大期 115

死生観 124

“付け人”人生 133

休日病 139

風呂、散髪、医者 148

センター・フォーカス 154

病氣見舞い 160

髪形 165

世襲 173

二代目 182

巧言令色 191

逆恨み 199

充電と閑居 208

昔気質 217

ああ、パーティー 226

マネーブーム 235

シルバーマーケット 244

あとがき 261

装画 堂本印象「白浜の連絡船」
A D 倉田明典

セピア色の写真

遺言

近頃、遺言を作るのが流行りとか。

このところの地価インフレで、住んでいる猫の額のような土地が、場所によってはヒトケタどころかフタケタも高騰しているところがあるというから、これまで遺産分与なんて考えてもみなかった人が、俄かに気になって書き出したりするそのせいもあるかも知れない。ちなみに、ある統計によれば公正証書遺言作成件数がこの十年程の間に倍にふえているという。

男はローン返済に追われ、しかも高騰とは無縁の地域に住んでいる身だから、まごまごすると、妻子に相続させるときは債務超過になって負債だけという可能性もなくはない。となると、遺言どころか、相続を拒否されるかも知れないと、逆にそのことの方が心配になってくる。

そんな男が、わがこととして遺言について真面目に考えるようになったきっかけの一つは、あの日航機事故だった。

それは、ダッチロールで揺れる機内で、死の覚悟を強いられながら、父親が妻と子へ向けて認めた、遺言というよりは最後のメッセージだった。テレビでその焼け残った手帳のアップが映され、アナウンサーがそれを読み上げたとき、不覚にも男は泣いた。

文章は、正確には覚えていないが、真率で、余分な修辞がないだけに、死に直面した父親の家族への思いが澄んで、それは美しくさえあった。

もちろん心残りは山程もあるのだろうが、こうして思いもかけない早い死を前にし、妻に向かって「君と一緒に頑張って本当によかったと思う。しあわせだった」と書きつけるときのその人の心情を忖度しながら、男は、

（さぞかし、こんな場面ではなしにゆっくり落ち着いて、妻子へ向けて遺言状を書きたかったことだろう）

と思うと、その無念が胸に迫るのだった。

人のまさに死なんとするやその言やよし、と古人は述べたが、そのときどれだけ心残りがあるかということ、同じ人物でもその言なるものになかなかな相違が出てくるのではないかと、男は思う。

この世に残していく妻の行く末を案じないでもすむだけの蓄えがあり、子供達がいい子でまず

間違はなくこの世を渡っていくであろうという確信が持てるなら、男は、たとい癌の宣告を受けても、さほどたじろがないですみそうな気がする。ということは、言いかえれば男達が死を恐れるのは、自分が責任をまだ果し終っていないそのゆえに、係累を不安に陥れるという、そのことへの焦燥感に他ならないのではないのか。

男はそう思うと、自分がもしもその日航機に乗っていたとしたら、きっと「ごめん、ごめん」と、詫びの言葉ばかりを書き連ねそうな気がするのだった。

*

男が、自分も遺書を書いておこうかと思うようになったもうひとつのきっかけは、古い友人の死であった。

男とその友人は、昭和二十年代の後半、男が初めて勤めた職場で机を並べたのが縁で、爾来三十年つきあいがあった間柄である。

その友人をかりにAとしておこう。

Aはいかにも良い家の育ちといった感じで、言葉遣い挙措動作から服装まで、端正というのはAのためにあるのではないかと、初対面のときに思ったほどすべてにわたってすっきりとし、容貌も白面の貴公子といった表現が無理なく似合った。

余分なことはほとんど口にしないう寡黙なたちだが、だからといって偏屈というのでもなく、笑顔がいかにその性格のあたたかさを窺わせるところが、人見知りの強かった男の気持をほぐし、

二人はたちまちにして親しくなった。

Aは、小学生時代からピアノをやっていて、中学のときにヴィオラに転じ、その頃は仲間と絃楽四重奏団を組み、月に数回集まっては演奏を楽しんでいるという、趣味を越えた特技の持主だった。

男は楽器はからしきだめだったが、戦時中兄や姉の影響もあつて、蓄音機の上にふとんをかけ、音が外に洩れないように気を遣いながら、モーツァルトやバッハやドビュッシーなどをよく聴いていたから、そういうAが羨ましく、ひそかな劣等感さえ抱かせられた。

結婚も、Aは華麗だった。相手は幼馴染みとかいう高名な外交官の娘で、混血ではないかと疑ったほどに、目鼻立ちがはっきりして色の白かったのも、男にとっては眩いばかりで、早婚だった自分との差を思い知らされたものだった。

やがて男はその会社を辞め、Aとは自然に遠のいたが、それでも年に一度くらいは、会って酒を飲む間柄が続いた。

すでに五十を越え、男は、髪が薄くなるのと白髪に変わるのと一緒に訪れ、朝鏡を見るのでさえ愉快でなくなつたというのに、Aは程よく銀髪に変わつて、端整にさらに磨きがかかつて、その出版社の重役という肩書がびたりの、気品に溢れた堂々たる風姿であつた。

男が久しぶりに会う手土産代わりに最新刊の自著を渡そうとすると、

「いや、もう買って読んだよ。しかし、君も苦労しているんだな」

と、Aはまるで他人事とは思えないといった表情を泛かべて、男をいたわるように見た。

「いや、あれに書いてあることは必ずしも自分のことじゃないからな。それに、近頃はそんな女の苦勞とはすっかり無縁になってね、かえってその真只中の辛さが懐かしいくらいだよ」

男がそう弁解がましく言うときAは、

「いや、そうかも知れないが、そんな詮索はどうでもいいんでね。とにかくあそこに書かれてあることは、われわれの年代なら誰だって、胸にしみるんじゃないのかな」

そう言うなり、例の癖で無口になり、目を伏せ物思いにふける様子で、酒のグラスをしきりと口に運ぶばかりだった。

「河岸を変えようか」というAの提案で、辿りついた店は、盛り場のはずれにある小さなカウントアのバーだった。

ママは男たちよりひと回りは若そうな、いかにも昔は可愛かっただろうなという感じを残した、優しそうな小柄な人だった。

「……この人はね、僕の音楽仲間だね。だが僕なんかと違ってちゃんと専門の大学を出ているヴァイオリニストなんだ。だからいまの僕等のカルテットのリーダーみたいな人でね。とにかくもう十七、八年になるかな、一緒にやるようになって」

男は、ことさらに、単なる音楽仲間なんだといわんばかりのAの話聞きながら、なんとなく、それですべてが飲み込めたような気がしたものだ。

それから一年程してからだった。Aの妻から男は突然電話を貰った。それは思いもよらなかったAの死の知らせだった。

「……三月^{みづき}ほど前に風邪をこじらせて入院したのですが、そのときは肺^{はい}癌^{がん}がもうかなり進行していて、手術もしましたが、やはり駄目でした。なにしろ、入院したことさえごなたにも知らせるなど言われておりましたので。

それにあの人はご承知のように無口な人でしたから、会社のこともなにも一切私には話してくれませんので、何がどうなっているのか、さっぱり分らないんです。もし何かご存じのことがありましたら、お教え頂けないでしょうか」

Aの妻の声音は意外なくらい平靜で、自分の知らない夫の側面への興味というか不安というか、むしろそうした詮索の方に気持が行っているように、男には受け取れた。

男は反射的に、（あの人は知っているのだろうか）と、そのことばかりが気になった。

その夜、店の開く時間を待ち兼ねて寄ってみると、灯りは消えたままで、ドアに「本日臨時休業させて頂きます」と、女文字の貼り紙があった。

（そうか、知っていたのか）

男はそう思うと、Aと女の辛さがどつと胸に迫った。

通夜の行われるAの家の手前でタクシーを降りると、暗がりから小柄な影がすつと男に近付いた。見ると、喪服姿のあの人で、傍らに十歳ばかりの女の子が手を引かれていた。

男はその子の顔を何げなく見て、（あつ）と声を上げそうになった。それは、親子とはここま
で似るものかというくらい、Aと瓜ふたつだった。

男は万事を了解して、その人と子供の間に立ち、その子の手を引いて焼香の列に並んだ。親子
二人が祭壇の前に立つ勇氣がないまま、男の現われるのを待っていたに違いないからだ。幸い、
Aの妻は男の家庭事情を知らない。男はそれとつさに芝居をする氣になった。

焼香の列が祭壇に近づき、あと一人となったところで、Aの妻と男は目を合わせた。

Aの妻は男に目礼したその視線を傍らの女に移し、さらにその横にいる女の子を捉えたとき、
きつとその目が光った。

男達三人が焼香を終えて出口にさしかかるところで、後ろから鋭い声で呼び止められた。振り
返るとAの妻のこわばった顔が迫っていた。

「この方、〇〇さんでしょ。いいえ、分っているんです。で、そのお子さんがあの人の子なの
ね」

呆然と立ちすくむ男達三人に、Aの妻は胸元から封書を取り出し、女の前につきつけた。

「これはあの人のあなた宛の遺書です。そしてもう一通弁護士さん立会いで作った正式な遺書が
あるけれど、その件については弁護士さんからそちらへ連絡がいくでしょうから。

それにしても、こんなことがあっていいのかしら。私一人が何も知らないで、皆グルになって
私を騙していたのよね」

Aの妻は、そう言うなり、啞然として見守る焼香者達の目も忘れ、その場に倒れ込んで声を上げて泣いた。

男は、女と子供を抱えるようにしてその場を逃れ、待たしてあるタクシーに乗って、天を仰いだ。

（いつぞやAが、『胸にしみる』と、俺の書いた三角関係の小説にひとかたならぬ共感を寄せたのは、つまりこういうことだったのか。それにしても、Aはさぞかし心残りだっただろうに）

そう思うと、ひとことこうなる前に自分にでも言ってくれさえすればと、Aのなにごとにつけ端整好きな性格が男はうらめしかった。

Aの女に宛てた遺書の中身はこうだ。

——あなたと子供に財産分与をする旨を遺言に書いたので受け取って欲しい。もちろんこれではじゅうぶんとは思っていないが許して貰いたい。おそらく妻をはじめ反対する者が多いだろうが、弁護士によく話してあるので、心配しないように。

という事務的な事柄の他に、女と子に対する心残りのたけが切ないばかりに連ねられているその遺言を読み終って、男はふっと、最近読んだ雑誌の記事を思い起した。

それは、小佐野賢治さんの葬儀に、刎頸の間柄であった田中角栄さんの長女真紀子さんが列席しなかった理由を書いた記事だった。

それによれば、亡くなった小佐野さんは、田中さんが外につくった子供の面倒を、田中さんに